インターネット上における自己開示が居場所感に与える影響

○藤井　美里（FUJII Misato）、竇　雪（DOU Xue）

Keywords：インターネット、自己開示、居場所感

１　目的

近年、SNS などの様々なインターネットサービスの普及により、オンラインでの居場所（インターネット上において、ありのままの自分を受け入れてもらえる空間）を獲得する人が増加している。しかしそのような居場所が、どのように深まっていくのかについては、未だ不明な点も多い。そこで本研究では、他者との交流において重要とされる「自己開示」に着目する。自己開示とは、自分自身について他者にあらわにすることを指す。インターネット上での自己開示の種類やその程度は、個人が感じる居場所感にどのような影響を与えるか、質問紙法を用いて検討する。

２　方法

539 人（うち男性 286 人、女性 253 人、平均年齢は 27.15 歳）を対象に、オンライン上で質問紙調査を行った。まず、インターネット上で最近コミュニケーションを取った個人やグループを思い浮かべてもらい、その方達とコミュニケーションを取るために利用している SNS、オフラインでの交流頻度、交流期間（オンライン・オフライン問わず）についての回答を求めた。その後、自己開示尺度（丹波・丸野, 2010）17 項目、社会的居場所尺度（原田・滝沢, 2014）15 項目への回答を求めた。なお、自己開示尺度は先行研究に倣い 3 つのレベルに分類した。

３　結果

インターネット上での居場所感に対して、自己開示が有意な影響を与えているか調べるために回帰分析を行った。その結果、レベルⅠ：趣味（$\beta = .72, p < .0001$）、レベルⅡ：困難な経験（$\beta = .52, p < .0001$）、レベルⅢ：決定的ではない欠点や弱点（$\beta = .52, p < .0001$）は全て居場所感に正の影響を与えていた。また β 値から、レベルⅠ：趣味の影響が最も大きいことが明らかになった。

４　結論

以上の結果から、どのレベルであるかに関わらず、より多く自己開示をするほど居場所感を感じやすいことが示された。また自己開示の 3 つのレベルを比較したところ、居場所感が高まるうえでレベルⅠの自己開示が最も多いことも明らかになった。開示者の性格特性に影響を与えていると考えられるレベルⅡと、自分がどんな人間であるかを直接的に相手に伝えているレベルⅢ（丹波・丸野, 2010）は、ともに開示者自身についてのより深い自己開示である。そのため、多くの人が閲覧できるインターネット上では開示への抵抗感が、レベルⅠよりも強いと推測される。また、今回の結果からは、オンラインでの居場所構築において、深い自己開示はあまり重要ではないことも示唆される。ただ、これは情報が広く拡散されやすいインターネット上だからこそ起こった現象であるのか、それともオンライン・オフラインに関わらず、居場所を構築する上でそもそも深い自己開示が必要ないのか、本研究では詳しく分析できなかった。今後はこの点についてさらに検討を進め、オンライン上における居場所の構築プロセス、及びデザインをさらに明らかにしたい。

【主要参考文献】

原田 克巳・滝脇 裕哉 (2014). 居場所概念の再構成と居場所尺度の作成　金沢大学人間社会学域学校教育学類紀要, *6*, 119-134.

丹波 空・丸野 俊一 (2010). 自己開示の深さを測定する尺度の開発　パーソナリティ研究, *18(3)*, 196-209.